

平成29年12月19日、地域づくりに携わる部署の職員と話した内容です。

自分の言葉で話す

市役所の仕事には、税金や戸籍など、正確さ、迅速さが求められる仕事も多くありますが、地域づくり、まちづくりは、将来にわたって、ずっと続くものであり、「これができたら正解」とか「ここまでやったら完成」はありません。そのため、地域づくり、まちづくりには、「正しい」とか「早く」といった価値観はそぐわないと感じています。



地域づくりやまちづくりに関わる部署の職員は、この部分を頭では分かっているけれども、やはり「正しく」「早く」を最善とする「会社の価値観」「時間に追われる国の価値観」で地域と向かい合っている場面が数多くあるように思います。

地域でまちづくりに携わってくださっているリタイア世代の方々も、長年の会社勤めで積み上げてきた「時間に追われる国の価値観」から、なかなか抜け出すことができません。市民も、担当する職員も、「時間に追われる国の価値観」で話をするので、「私達の暮らす地域をどうしようか」という大きな目標の議論よりも、どうしても目の前の問題に対して、「早く」「正しく」結論を出すという議論になりがちです。

日本全体で、既に人口減少が始まっています。人口が縮小すれば、税収が減ります。高齢化も進み、社会保障費の支出は増える一方です。いずれは、行政が、何もかもをやる時代ではなくなります。

「長久手市は人口が増えているから安心」ではありません。今から、人口減少社会を見据えて、自分達の暮らしをより良いものにしていくために、市民自ら行動する「市民主体のまちづくり」が必要なのです。

ある職員から、次のような悩みを聞きました。

「市民主体のまちづくり」を市民にお願いすると、「行政がやるべき仕事を、市民に丸投げするのか」と言われる。そのとき自分は、どうしても「すみません」と謝って帰ってきてしまう。でも市長からは、「市民主体のまちづくり」と言われる。悩んでいる。

私は、その職員に「なぜ、今の長久手市で『市民主体のまちづくり』が必要なのか、あなたは言えますか?」と尋ねました。「市民に丸投げか」と言われたと

き、自分の言葉で、「市民主体のまちづくりとは？」「なぜ、今から取り組むか」を説明できなければ、やらされ感の仕事になります。市民にも伝わりません。



例えて言うならば、自分が食べ終わった弁当のごみを、どうしたら隣に座っている人に片づけてもらうかです。悩んでいる職員の状態は、見知らぬ隣人に何の説明もなしに、「私の弁当のごみも片づけてください」と頼んで、「どうして私が、見知らぬあなたの分を捨てないといけないのですか！」「なぜ、自

分でやらないんですか！」と断られているようなものです。

なぜ、隣に座っている「あなた」にごみを片付けてもらう必要があるのか、きちんと説明をして、「分かった。私があなただのごみも一緒に捨てましょう！」と言ってもらえるように、その人の心に火をつけるのが職員の役割です。

なぜ、市民主体のまちづくりを進めているのか。もう一度、よく考えてほしいと思います。



～市長の話を聞いて～

自分は分かっていることを、全くその詳細を知らない人に伝えようとするとき、自分の説明力不足を棚に上げて、「もー、なんで分からないの！」とイライラしてしまうことがあります。

今回、市長の弁当の例え話を聞いていて、「なるほど」と思いました。自分の言葉で分かりやすく、例え話も交えながら説明することが、相手に分かりやすく伝えるときには必要だと感じました。